

## はじめに

土肥秀行

2018年度の第3号に続き2号ぶりに、国際言語文化研究所内に設けられ、関西圏を中心に活動する現代イタリア文学研究会の成果をまとめ、特集する。

前回の特集を構成していた5本の論考は、伊語のもの3本、和文のもの2本であった。今回はそれぞれ2本と1本であるが、和文にしても翻訳であるので、オリジナルが日本語である原稿は含まれていない。実はこれは当研究会のねらいに沿う。前提として日本のイタリア研究者をとりまく状況があるが、日本から伊語でも発信していく必要があるにもかかわらず、今までそれが可能なメディアがこの国には存在しなかった。当研究会が頻繁にコラボレーションする関西イタリア学研究会（ASIKA）では、毎月最終日曜日に定例の研究発表会が開かれており、しばしばイタリア人研究者がイタリア語でのみ発表をする機会がある。そうなってしまうのも、発表者が、必ずしも日本語話者とは限らず、扱うテーマも日本と関係がなく、聴衆も十分なイタリア語力を有しており通訳・翻訳の必要性がない、という環境であるためだ。イタリア語のみでの口頭発表があるならば、それを受けてイタリア語のみの論集があってもよいだろう。そのような発想から現代イタリア文学研究会がうけもつ特集では「イタリア語色を強く」している。

以下、今号に寄せられた3本について解説を加える。

立命館大学の外国語嘱託講師であるロベルト・テッロージが寄せるのは、以前の特集にあった「高貴な愛」の起源と歴史についての論考の続編である。前回にもまして脱西欧的な視点から、恋愛（詩）の発明者を自認するヨーロッパ内の定説に対し、批判的な再検証を試みている。

ローマ大学サピエンツァ校でラウラ・ディ・ニコラのもとで現代イタリア文学を修めたクラウディア・デッラカーザは、現在イングランド北部ダーラム大学の博士課程にて論文「イタロ・カルヴィーノによる日本」を準備中である。2019年2月より3ヶ月間、国際日本文化研究所の客員研究員として、日本での調査にあたった。期間中、先に挙げた関西イタリア学研究会で報告「日本におけるカルヴィーノ一千の庭から虚無」をイタリア語（通訳なし）で行っている（2019年4月14日、立命館大学衣笠キャンパス）。本稿は、その発表原稿の改訂増補版である。

国際言語文化研究所の客員協力研究員で、関東地方のいくつかの大学で講師を務める山崎彩は、既に数冊の単訳を出している新進気鋭の現代イタリア文学専門の翻訳家である。今回は、文学地誌的な「中欧」の概念形成に多大な貢献を為した、作家であり批評家のクラウディオ・マガリスの短文を訳している。個人的な回想も含めつつ論じられるのは、イタリアの北東部とその先の「あちら側」についてである。トリエステ出身のマガリスは、辺境の地においてイタリア性を体現する小説家イタロ・ズヴェーヴォ以降の流れに与しており、現在のイタリア文学にとって重要な存在であるにもかかわらず、日本での紹介はなかなか進まない（2冊の研究書の邦訳があるのみ）。その状況を打破する一歩となる訳稿である。

「イタリア語色を強く」はしてみたものの、内容はというと、図らずもイタリアらしさからは遠い。むしろその肥沃な文化がもつ他者性あるいは折衷性へと目をむけさせられる特集となっている。